

万葉集「懸け」の事例について

(後篇)

福 沢 武 一

(2) 「香具山の宮」(199歌)

挽歌(巻2)

高市皇子尊の城上の殯宮の時、柿本朝臣人麿の作れる歌

懸けまくもゆゆしきかも 言はまくもあやに畏き 明日香の真神の原に ひさかたの天つ御門を かしこくも定めたまひて 神さふと磐隠ります やすみしわが大君の きこしめす背面の国の… 万代にしかもあらむと 木綿花の栄ゆる時に 我が大君皇子の御門を 神宮に装ひまつりて 使はしし御門の人も 白妙の麻衣着て 埴安の御門の原に あかねさす日のことごと 鹿じものい這ひ伏しつつ ぬばたまの夕べになれば 大殿をふり放け見つつ 鶉なすい這ひもとほり さもらへどさもらひかねて 春鳥のさまよひぬれば 嘆きもいまだ過ぎぬに 思ひもいまだ尽きねば ことさへく百済の原ゆ 神はふり葬りいまして あさもよし城上の宮を 常宮と高くしたてて 神ながら鎮まりましぬ 然れどもわが大君の 万代と思ほしめして 造らしし香具山の宮 万代に過ぎむと思へや 天のごとふり放け見つつ たまだすき懸けて偲はむ 畏かれども (199歌)

挽歌(巻13)

懸けまくもあやに畏し 藤原の都しみみに 人はしも満ちてあれども 君はしも多くいませど 行き向かふ年の緒長く 仕へ来し君が御門を 天の如仰ぎて見つつ 畏けど思ひたのみて 何時しかも日足らしまして 望月のたはしけむと 吾が思ふ皇子の尊は 春されば植槻が上の 遠つ人松の下道ゆ 登らして国見あそばし 長月の時雨の秋は 大殿の砌しみみに 露負ひてなびける萩を 玉だすき懸けて偲はし み雪ふる冬の朝は さし柳根はり梓を おほみ手に執らし賜ひて あ

そばしし吾が大王を 煙立つ春の日暮し まそ鏡見れど飽かねば 万世にかくしもがもと 大船のたのめる時に 泣く吾の目かも迷へる 大殿をふり放け見れば 白妙に飾りまつりて 内日さす宮の舎人も たへのほの麻衣着れば 夢かも現かもと 曇り夜の迷へる程に あさもよし城上の道ゆ つぬさはふ石村を見つつ 神葬り葬りまつれば 行く道のたづきを知らに 思へどもしるしをなみ 嘆けどもおくかをなみ 御袖の行き触りし松を 言問はぬ木にはあれども 荒玉の立つ月ごとに 天の原ふり放け見つつ 玉だすき懸けて偲はなかしこかれども (3324歌)

1

199歌はあまりにも著名です。集中の最長篇であるばかりでなく、文字通り一大雄篇なのです。

ここでは末尾の「懸けて」を主題にします。念のため、予備的な知識を確かめておきます。

冒頭は天武天皇の事績を述べています。続きの省略部では、天皇の命に従って高市皇子が活躍する壬申の乱の戦闘が活写されています。

戦後、皇子は香具山のほとりの宮におられましたが、若盛りに他界され、これまでお住いの宮殿は葬儀のため飾られました。「神宮」です。やがて城上に葬られ、ここが「常宮」となります。しかし、供奉の臣下はご生前を忘れかね、香具山の宮を仰ぎ見ながら皇子を追想申しあげるのです。

さて、文末の「懸けて偲はむ」は、諸釈等しく、——皇子を「心にかけて偲ぼう」。

「香具山の宮」を傍観的・添景的に「見つつ」というだけならば、「わが大君に」以下「思へや」までの長大な表現はなにの意味があったのかと不審です。その重みを受けとめて、「偲はむ」へ橋渡しをつとめるのが「懸けて」の一語です。「香具山

の宮」に「大君」をことよせて偲ぶのです。こうした理解に立っていると思われる釈が一つあります。

香具山の宮にかけて皇子の尊を偲び奉らう。(古典全書本)

「懸く」は関係づけることです。連想し、なぞらえることです。

2

全く同じことが3324歌の「懸けて偲はな」についてもいえます。ここでも通解は、心にかけて偲ぼうよ。これは「松を……ふり放け見つつ」と関係がつかずじまいです。もっと悪いのは、「天の原」そのものを「ふり放け見つつ」と解している向きです。^①

松を仰ぎ見る也。されば天の原と言へるは、天を仰ぎ見る如く仰ぎ見る意。(略解)

その松を仰ぎ見ながら「心にかけて」というのは、至るべきところへまだ至っていません。その松はただの松ではありません。

御袖の行き触りし松

です。皇子を偲ぶ重要なすがです。

春されば植槻が上の 遠つ人松の下道ゆのばらして国見遊ばし……

この松に相違ありません、——「御袖の行き触りし松」は。

前句に「松の下道」とあるのは、之が伏線……。 (松岡氏論究)

思い出の色濃くまつわたった松です。見る人をして皇子の形見と思わせずにおかないのです。松に皇子を懸けることになったのは当然です。松に皇子を関係づける、これが「懸け」の本義です。

御袖の触れし松なれば、やがて皇子尊を見奉るやうにうやまひてみる心をいへり。(代匠記初稿本) 古義、同解

正解からは思いきり遠くへいったものです。

物言はぬ木ながら形見のやうに朔日ごとに、ふりさけ見つつ懸て思ひ奉ると也。(拾穂抄)

物言はぬ木ではあるけれども、(皇子の御形見として) 月頭毎に見やりつつ、恐れ多いけれども心にかけて……。 (松岡氏論究)

「懸け」の認識不足が二つの釈に致命的でした。「形見として」と「懸けて」が統合すべきです。

この欠を免れた解がないではありません。

非情の木ではあったが、この後も月毎に、空の彼方に仰ぎながら、皇子の俤にかけて偲ぶことにしたいものだと思ふ。(総釈斎藤清衛氏解)

さらに「懸けて」の語釈として、

皇子の御姿にあてて御偲び奉りたいものだの意。(同書)

もっと正しくは、「松を」仰がながら、その「松に皇子を」かけるのです。それを199歌が示唆してくれます。

御袖の触れた松を……仰ぎながら、皇子さまに寄せて思おう……。 (古典日本文学全集村木氏訳)

ここでも「松に皇子を懸けて」と補正したい。ここと199歌に限った文脈ではありません。6歌の「妹を懸けて偲ひつ」には「風に」を補って理解すべきです。

3

疑問の多い例歌をここに検討します。

かしこきや天の御門を懸けつればねのみし泣かゆ朝よひにして (4480 藤原夫人)

「天の御門」は天皇^{みかど}、「懸け」は、心にかけて、——これが通解です。訳文を代表で示します。

恐れ多い天皇を心にかけてお慕いするようになったので、朝夕泣けるばかりです。(大系) 二つのものをかけ合わせるものが「懸く」のはずです。何かに「天の御門」を関係づけたのです。改めて「天の御門」から問いなおす必要を感じます。

通解は、大系の訳文でも知られるように、天皇その人と見られています。しかし、199歌冒頭の「天の御門」にしても、次のように考えることこそ自然です。

天上の宮殿といふことで、崩御された天皇の神霊のいます所 (全書)

天の御門、天上の宮殿の義で、山陵をいふ。(全注釈) 窪田氏評釈、同解

同義の例歌として199歌と次のものを挙げています。

……久方の天宮^{あまつみや}に 神ながら神といませば…… (104 穂積皇子)

おくれませながら申します。4480歌は挽歌で

しょう。崩御された天皇を思慕すればこそ朝夕に泣けてくるに相違ないのです。大伴旅人の死を悼んだ次の作品が参照されます。

君に恋ひいたもすべなみ^{あしなづ}芦鶴のねのみし泣か
ゆ朝夕にして (456 金明軍)

本義は天上の宮殿でしたが、神霊のいます山陵と解して誤りはありますまい。では「天の御門」(山陵)を何に懸けたかが問題になります。

199 歌・3324 歌等の冒頭の「懸けまくも」には一言しました。それは憚りを意識した言表でした。間接に、遠まわしに、「ふれる」ことです。その場合、文脈として両歌とも「君を懸く」ですが、「何に」が明らかにされていません。次の場合も同様です。

玉手次懸けぬ時なく わが思へる君によりて
は…… (2286) 3297 歌、同巧

この「懸け」も「心にかける」と通解されています。実は、「君を」「何に」か連関させています。「何に」を明示しないのは特殊なあれこれではなかったのです。あれこれにつけて連想していたのです。同様に、4480 歌もなにかにつけて山陵を連想したと考えます。199 歌の冒頭なども、なにかにつけて閑説するといった事情だと思ふのです。

4

2324 歌に、も一つ「懸けて偲はし」があります。

心にかけて賞美され、(沢瀉氏注釈)

これが通解です。

心の中に描いて (折口氏口訳)

咲きさかる萩の花を目の前にしているはずです。「萩の花を」何かに関係づけたのです。その点を指摘した解が一つだけ見出されます。すばらしい例外です。

3286、及 3297 の用例によれば、「かけて」は心にかけての謂であるが、芽子^{はぎこ}に対してさのみ執着せられたとは考へられぬから、此は「はぎ」(歯木)といふ名にかけて意中の明眸「皓齒」を偲ばれたといふ意とすべきである。(松岡氏論究)

これは松岡氏の「懸け」の語訳においても例外です。すばらしいのは二つのものをかね合わせた点です。この例外を他の諸例に及ぼすべきです。ただし、「歯木」「皓齒」の連想は無稽です。萩の花の風情を婦女に「連想し、なぞらえて」賞美し

たのです。ただ萩の花を賞美するだけのことだったら、「たまだすき懸けて」は大袈裟すぎます。ほとんど滑稽です。

注

① その向きは、——全釈・全注釈・佐々木氏評釈・私注・坪野氏秀歌、等。

考・井上氏新考は 199 歌に準じて「天如」と改めています。これは問題外です。

久方の天見る如く仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも (168 人麿)

これも「御門」を「仰ぎ見し」なのに、次の諸注は「皇子」に誤っています。

——金子氏評釈・全釈・土屋氏(総釈・私注)。

② 天皇が次のように説が分れています。

天智 拾穂抄。

天武 考・略解・井上氏新考・全釈・総釈
豊田氏説・石井氏古典考究・佐々木氏
評釈・大系・沢瀉氏注釈・小学館本。

聖武 代匠記。

「天の御門」を天皇と解さない諸家においても、この天皇は天武天皇と通解されています。ただ一人、土屋氏私注が聖武説です。筆者はそれに賛じます。従って、藤原夫人その人が変わってきます。詳細は別稿を用意しますが、しばらく私注を参照ねがっております。

(3) 「雪降る山」(1776 歌)

神亀 5 年戊辰秋 8 月の歌一首并短歌

人と成ることは難きを わくらばに成れるわが身
は 死にも生きも君がまにまと 思ひつつありし
間に うつせみの世の人なれば 大君の御命かし
こみ 天離る夷治めにと 朝鳥の朝立ちしつづ
群鳥の群立ちいなば① 留りてわれは恋ひむ
な 見ず久ならば (1785 歌)

反歌

み越路の雪降る山を越えむ日は留まれるわれを懸
けて偲はせ (1786 歌)

右 5 首 (1785—89 歌)、笠朝臣金村之歌中出。

1

まず反歌の「雪降る山」が問題になります。作歌時は旧暦 8 月。雪が降るまでには間がありすぎ

ます。

こしちは雪深きところなれば、惣じていへるなるべし。(代匠記初稿本) 略解・総釈川田順氏説、同解

彼方の寒国にて、外より雪の早く降る故に……。(代匠記精撰本)

これでは一句が一向に生きていません。

越の国は雪深き国なれば、行経ると云意によせて詠める也。(童蒙抄)

これはちとひどすぎます。

「雪降れる山」といふべきを「雪ふる山」といへるなり。(井上氏新考)

如何に越路とても早過ぎるやうであるが、越路といへばすぐに雪を思ひ起すから……。

(全釈)

これらも無造作すぎます。

北国の旅の概念を表すために、慣用語が無造作に使用されたものと見られる。(全注釈)

幾ら北陸道でも秋8月だといふのに、「雪降る山」もすさまじい、といふことにならうが、すべて概念的・類型的な弊が出たのだ。(大成10)高崎氏「笠金村」

すこし言葉を慎しんでもらいたい。という時、こんどはこっちが答えなければなりません。

——とにかく雪の降る季節に越路の山を越えなければなりません。それを歌自体が言明しています。それを基本に理解を進めるべきです。

もし直行すれば、恐らく8月のうちに越地についているはずですが。越地で秋を過ごし、冬を迎え、そこで雪山を越えるような事情——巡察のためなど、そんなこともあったかと想像されます。とにかく雪の降りつつある山を越えなければならないのです。その証明を与えるのが長歌の結句、「見ず久ならば」です。

雪降る雪のころは、8月からすれば、「見ず久」といえます。事情のいかんはともかくも、主題歌の「雪降る」はあくまでも具象そのものです。これを無視したら一歌の息の根をとめる行為です。そんなことをするためにわれわれは万葉集を読まなかったはずですが。

2

まだ主題の一半がのこっています。「懸けて」の考察です。通解の「心にかけて」に従うべくもな

いのです。

私見を卒直に申し述べます。——「懸く」は二つの事物あつての一語です。主題歌の場合、その一つは「偲ばるべきわれ」、つまり、京にとどまっている「私」です。も一つなければなりません、

「心にかけて」の「心」では絶対ありません。「雪降る山を越えむ日」は「見ず久なる日」でした。その日は、京にとどまるものにも気がかりな日が続いたのです。そのことを雪山越えの日に思いやれよ、と訴えていそうです。しかし、それだけにはとどまらずまい。雪山を難渋して越えるのです。その時、京にとどまって恋い嘆いている私を偲んでくださいと訴えているのではないのでしょうか？

越路の雪がふる最中の山をお越えになる日には、京にとどまっている私があなたに劣らず嘆き続けて久しいことを思いやってくださいよ。

拙い訳文を与えました。とにかく「雪降る山」は観念遊技ではないのです。それは一歌にぬきさしならない一句です。

一歌の理解を深めるため諸注に目を通しました。目ぼしいのは次のごとくです。

私は常にあなたの旅の苦しみを思ひやってみますから、苦しい時にでもせめて私のことを思ひ出して下さい。(全釈) 総釈川田氏説、同解。

この解は次のものの血を引いています。

途中で難儀に逢ひたまはば、都に残りて心配して居る我を思ひて自愛したまへとなり。

(井上氏新考)

これは更に代匠記までさかのぼります。

8月の歌に雪零山とよめるは……路次の艱難を思ひ遣て云へるなり。(精撰本代匠記)

旅先の艱難もさることながら、京にとどまって、じっと恋いこがれているものの苦悩を忘れては片手落ちです。こうした二つの苦難をかねあわすのが「懸け」にほかなりません。そこが明らかにされないうらみはあるものの、在京の苦渋を指摘しえた次の見解は断然群を抜いています。筆者は金子元臣氏です。

越の雪山を踏破する日は、行客が愈々北地の異境に足を踏み込んだことを意識する時

で、随って遠く故郷の空を回望して、胡馬越鳥の感に打たれる時である。その時は京に独り親友を失うて寂莫に禁へぬ自分の1人居ることを、忘れずに憶ひ出してくれと訴へた。送別の作として一別手を出したもので、その濃到深切の情味は掬んで尽きぬものがある。

新古の諸家の解説は悉く斜視である。(評釈)

金子氏は京にとどまるものの苦難に急すぎました。代匠記の系統では旅先のそれに専らでした。二つが同等に置かれる時、「懸け」は初めて可能だったのです。

3

金村の全作品を見渡すに、^②長歌と反歌の焦点がびたり合っています。そればかりか、長歌の措辞がそのまま反歌に反復されています。主題歌では、「留り居て吾」恋ひむ(長歌)と、「留れる吾」(反歌)。「見ず久」と「雪降る山を越えむ日」の照応は先に関説しました。その確認のためにこれまでの論証を費したとっていいのです。

例歌を他に求めて傍証とします。そこには「懸け」が含まれていて、本稿にはあつらえ向きに思われます。

角鹿^{つのが}の津にて船に乗る時、笠朝臣金村の作れる歌一首并短歌

越の海の角鹿の浜ゆ 大舟に真櫂貫きおろし
いさな取り海路に出でて あへぎつつわが漕ぎゆけば 大夫の手結が浦に 海人をとめ塩焼く煙 草枕旅にしあれば ひとりして見るしるしなみ 海神の手に巻かしたる 玉嚶懸けて偲ひつ 大和島根を(366歌)

反歌

越の海の手結の浦を旅にして見ればともしみ 大和偲ひつ(367歌)

長歌の焦点は「偲ひつ大和島根を」です。反歌のそれは「大和偲ひつ」です。全然同一なのです。それぞれに契機だったものも完全に照応しています。すなわち、「旅にしあればひとりして見るしるしなみ」と「旅にして見ればともしみ」です。「懸けて」が反歌にはありません。あるものとして受けとられます。「懸け」は、関係づけ、なぞらえ、連想することです。美しい手結の海辺をただ「ひとりして」眺める物足らなさから(ともしみ)、——もし大和だったら妹と2人して眺めようもの

を……と、そぞろにふるさと大和が思い合わされたのです。一つのものに、他のものをかね合わせる、——この論理が「懸け」の本性です。^③ それを366歌の諸注はどのように理解したでしょうか?

通解は「心にかけて」です。これは一歌を生かしていません。

ここよりかしこを思ひやり、心をかけやりて(童蒙抄)

ふと可愛い妻を思ひ出して(金子氏評釈)
「懸け」を生かそうと気を配っています。しかし、一語の本義に気づいていないのです。

4

「懸け」の論述は終わりました。終わったところで、批評鑑賞がのこっていることに改めて思い当たります。実は、そのための訓詁注釈だったはずで、とかく本筋を忘れ勝ちなことが反省されます。しばし作品の前に足をとめ、鑑賞者・批評家になってみるべきです。

366-7歌

海上に浮び出づる心細さが歌はれてゐる。併し巻1の軍王の歌(5歌)に似た句がかなり多く、その影響を受けてゐることは争はれない。(全釈)

郷愁を太く深い線で彫りこむやうに詠んでゐる。調子にも用語にも軍王の歌(5歌)を思はせるものがある。(佐々木氏評釈)

金村の著しい傾向に創意の乏しさが指摘されます。366・367歌とて例外ではないのです。

秩序よく整備され、一往思ふところを尽してゐるが、それだけで、生気に乏しい。それは説明に専らであって、感激の描写がないからである。先人に依って既に拓かれた道を無意味に踏襲するばかりだからである。(全注釈)
手きびしい評言を受けいれざるをえません。たとえば、「懸けて」——歌のポイントをなすべきこの一語も、さして生きていません。

形式だけで感激がない。全く口先だけの職業歌である。……結びの2句が倒装法になるのは、金村長歌の特徴の一つで、如何にもマンネリズムのもの、この歌の反歌も全く云うに足りない愚作。(大成10高崎氏評)

口先だけになりかねません。しかし、いささか

弁護したい。佳景を前にし、それ故に余計もの足らなく思う心——これが一歌のモチーフですが、こればかりは借物ではありません。実感がものを言っているのです。私事を申せば、——かりそめの観光の旅先でしばしば思いあわせたのは、この長短2歌でした。

1785-6 歌

従来、親友が先輩に贈った送別歌とされました。しかし、その措辞と情感が濃密すぎます。

笠金村は、「……娘子に詠へられて作れる歌」(巻4、543)の如く、娘子に代って歌を詠んで居り、これもその類であらう。④(全注釈)

全く同感です。武田氏は更に次の推定を述べています。

その娘子といふのは、金村の女なるべく、集中に、笠の女郎として呼ばれてゐる人であるかも知れない。(同上書)

さて鑑賞ですが、

整正の美に意をつくしてはゐるが、独創的な力量に乏しい。(作者別評釈佐々木氏評)

これが定評です。しかし、作品そのものを正解しないで発言していることを忘れてはなりません。

「雪降る山」は越の国といふよりの概念で、この歌全体の弱所を最も明瞭にあらはしてゐるものである。(窪田氏評釈)

こうした理解を斜視と評した金子氏に賛します。その一文は先に引きました。

濃く深切の情味は掬んで尽きぬものがある。(同氏評釈)

一節を重出しました。いささか誇張を感じますが、過小評価より罪はありません。代作だと思われませんが、大事なところが生きています。情感がこもっているのです。

さを鹿の鳴くなる山を越えゆかむ日だにや君がはた逢はざらむ(953 金村之歌中出)

旅上の機微をとらえ得ている点が共通します。張りもあります。これらを裏づけているのは実感なのです。

8月であるから、「雪零る山」といふのは、早すぎるが、越路といへば雪を思ふので、修飾の語のやうに用ゐたのであらう。(作者別評

釈佐々木氏解)

単なる修飾語ではありません。早すぎもしません。月日がたつほどに家妻の悲嘆も深まるのです。越路の山の積雪にも劣らないほどに。

佐々木氏は367歌と1786歌を総括して批判します。

格調の正しい暢達の作ではあるが、おしなべて同じ色調であって、各の境地にあつて内面からにじみでる、特殊なこまやかな味がない。郷愁をのべた歌に、心理の動きが認められるが、それも長歌の終りの部分を概念的にまとめたもので、独立しては、おほまかすぎて風致に乏しい。(上に同じ)

否を強く言いたい。いささか言葉まけしている長歌に対し、反歌は表現と情感が融和をとげ、佳調をなしています。嘆きが内面からにじみ出し、周辺まで色濃く漂っているのです。それを汲んでやらなくては金村の立つ瀬はありません。

注

① 「群立ちゆけば」が通訓です。小学館本と共に「いなば」の訓を選ぶべきだと考えます。詳細は別稿に譲りました。

② この後に引用する366・367歌の組合わせのほかに、次の組合わせについても参照願いたい。

543・545歌、546・548歌、920・922歌、928・929歌、935・936歌、1787・1788歌。

③ この論理は万葉に限るものではありません。さきには古今歌を一つ引きました。ここには伊勢物語の有名な一歌にふれます。

筒井づの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに(23段)

「井筒に言ひ及んだ」「井筒に欠けた」「井筒と自分とかけ比べた」など諸説があるが、確かでない。「井筒の高さを早く過ぎよと心にかけて願った私の身の丈」とも解けようか。(松尾聡氏新注伊勢物語)

「懸け」の諸注が出ついています。通説は「かけくらべて」です。それも確かでないと考えた松尾氏は、万葉畑の通説をここに移し植えたかと思われます。それよりも在来の説の方が立ち勝っています。要するに「懸け」の語釈が徹底を欠いているのです。その中で塚本哲三氏

が一番立ち入っています。

「かけ」はこれからそれへと及ぶという義の語で、ここも「僕の背とあの井筒とどっちが高いか」と井筒を引合いに出して、それと背丈をくらべたというのである。(通解伊勢物語)

「かけ」は二つを関係づけることです。背丈を井筒にあてがい、「もうここまで来た」「いまに井筒に追いつく」等々と、井筒に背丈を関係づけ、比較することです。それは万葉の数々の「懸け」と別なものではないのです。

- ④ 代作説に賛成は、私注・窪田氏評釈・久米氏作品と時代・大成(10)高崎氏、等。

(4) 「二上山賦」(3985 歌)

二上山賦一首

射水川いゆき巡れる たまくしげ二上山は 春花の咲ける盛りに 秋の葉のにはへる時に 出で立ちてふり放け見れば 神からやそこば尊き山からや見が欲しからむ すめ神の裾みの山の 渋谷の崎の荒磯に 朝なぎに寄する白波 夕なぎに満ち来る潮の いや増しに絶ゆることなく 古ゆ今の現に かくしこそ見る人ごとに 懸けて偲はめ (3985)

渋谷の崎の荒磯に寄する波いやしくしくに古思ほゆ (3986)

たまくしげ二上山に鳴く鳥の声の恋しき時は来にけり (3987)

右、3月30日依興作之 大伴宿禰家持

1

長短歌共に、平明な作との評を得ています。解釈の面でも、鑑賞の面でも、ついで問題にされたことがありません。

ここに敢えて問題を提起します。とくに長歌の末尾近くに疑問を懐くのです。

……いや益に、絶える事無く、昔から現在まで、このようにして、この山を見る人毎に、心にかけて賞美することであらう。(沢瀉氏注釈)

これは通解を示すための訳例です。その問題点を列挙します。

- (1) 「昔から現在まで」は、「賞美して来た」ならいいけれど、「賞美するであらう」は解せません。

(2) 「このやうにして」とは、具体的に言って、どのようなのでしょうか？

(3) 「懸けて」については上来、私解を陳述しました。ここも「心に懸けて」ではなくて、何か、何かを、連想したのでなかったのでしょうか？ 右の問題点に諸注は絶えて答えてくれません。ただひとり、(1)(2)について山田孝雄氏に異解があります。詳細は後ほど検討するとして、要約を氏の訳文に語ってもらいます。

……昔より今の時に至りても、この山につきての賞美は絶ゆること無きが、かくの如くところ、将来も之を見る人毎に、必ず之の心に懸けて、永く思慕の料とするならむとなり。(同氏万葉五賦)

「古ゆ今の現に」と「見る人ごとに」の間に大幅な補足を行なっています。それは許容の限度をはるかに越えているといわねばなりません。

要は、右の3点を中心に私見を述べることにします。ひとえに大方のご批判を願うものです。

2

長歌の前半は、要点をきりつめれば次のようになりましょう。

二上山は、神からやそこば尊き、山からや見が欲しからむ。

後半は、

古ゆ今の現に、かくしこそ(二上山を)見る人ごとに懸けて偲はめ。

第1反歌は、

いやしくしくに(二上山の)古思ほゆ。

三つは互いに連関しています。「二上山」が共通の主題です。それはいうまでもないことで、も一つ、いずれも古代を思向しています。もっとも、長歌後半の「古」、第1反歌の「古」に問題があり、検討が必要になってきます。

第2反歌の「古」は二つのとり方に分れています。

古思ほゆといふは、長歌の、古人も賞美したといふのを受けてゐる。(全注釈)井上氏新考・窪田氏評釈、同解

も一つは、

大王の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ(304 人麿)

のやうに、さかのぼって、天地創造の古へが

思はれるといふのもあらうか。(総釈佐々木氏説) 考・古義・山田氏五賦、同趣

後者を選ぶべきです。「古」は、まさに304歌のそれであり、長歌前半の「神から」に照応しています。そればかりではありません。長歌後半の「古」「今の現」が、それぞれ「神から」と「山から」に照応しているのです。

——なぜそれが言えるか？ それは「懸けて」にかかわる問題です。

先にも一言しましたように、「懸く」は何かに関係づけることです。主題歌においては、二上山の「尊さ」を「神から」に、その「美しさ」を「山から」に、それぞれ関係づけて歌っています。「神から」は「古」、「山から」は「今の現」に所属します。「古」と「今の現」の両方にわたることを「古ゆ今の現に」が意味します。そのことを別な面から保証するのが「かくしこそ」です。それを次項で扱います。

3

「かくしこそ」に諸注は立ち入ることをしませぬ。一例を引きます。

昔から現在に至るまで、これだからこそ見る人すべて、心にかけて二上山を嘆賞するのであろう。(大系)

これでは問題点がちっとも解決されないのです。もっと不可なのは、「かくしこそ」を簡単にカットする向きさえあります。それは絶対に間違いです。「こそ」を添えています。それだけでもただごとでない一句だったはずなのです。

改めて長歌の後半を見渡しますと、——「すめ神の」から「満ち来る潮の」までは「いや増しに」の長大な修飾です。その「いや増しに」は、直接には文末の「懸けて偲はめ」へ接続していきます。それは次の例と同様です。

……見れど飽かぬ吉野の河の 床並の絶ゆることなく また還り見む (27 人麿)

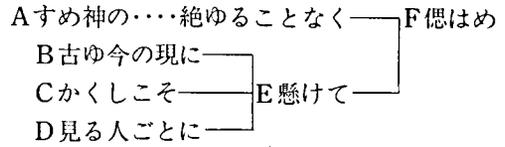
……音のみも名のみも絶えず 天地のいや遠長く 偲ひゆかむ…… (196 人麿)

……百代経て 偲はえゆかむ 清き白浜 (1065 田辺福麿歌集)

もっとずっと近いところに例証があります。ほかでもありません、第1反歌です。「寄する白波いやしく」は「いや増しに絶ゆることなく」に等

しく、それぞれ「思ほゆ」「懸けて偲はめ」へ直結しています。もっと厳密には、「偲はめ」へ直結するのは、ということも、「古ゆ」から「懸けて」までは括弧にくるべき文脈です。

念のため長歌の後半を図示します。



さて、「かくしこそ」の内容が具体化されなければなりません。「かく」と指示し、しかも「し」「こそ」とまで念を押しているのですから、それにみあうものがすでに表明されていて当然です。それは「神からやそこば尊き 山からや見が欲しからむ」を除いて外に考えられません。それは「古から現代にわたって」おり、BCが表裏をなして「懸けて」へ修飾しています。結果からいえば、「懸けて」を投入した以上、BCDの投入も不可欠になったのです。

このような文脈である時、長歌の後半に大幅な補足は一切つつしむべきなのです。

4

すめ神とは二上山をやがて神といへり。(代匠記)

「神」といふは「山」をさし、「山」といへるは「神」をさせるにて、「神」と「山」とは二にして一、一にして二なるなり。(山田氏前掲書)

それはそうです。しかし、二つはちゃんと使い分けています。「神」は神霊であり、神秘的、いとも尊貴なものです。目に見るを得ず、時間的には古代的存在です。これに対し、「山」は、神が「今の現」(現代)に顕現した姿です。目に見るを得る存在です。それは次の例歌でも同様です。

……讃岐国は 国からか見れども飽かぬ 神からかここだ貴き…… (220)

いま現に目に見る「国」と、目に見えない古代的な「神」が対置されています。更に思いあわされるのは「三山歌」です。

香具山は畝傍雄々しと 耳梨と相争ひき 神代よりかくにあるらし 古もしかにあれこそ うつせみも 孀を争ふらしき (13中大兄)^①

まず争ったのは神霊としての三山でした。とこ

ろが、「うつせみ」——神靈がこの世に形をとった姿、人の目に見える三山の山容も、いま現に相争うものごとくなのです。一歌において、「神代」「古」「うつせみ」の三つが対比されています。「神代」と「古」は同一なのか？ 「古」は、人代にくだった「古代」の意か？ 前者です。その明証を主題歌が提供してくれたのです。

以上のようにして、「古」は「神」、「今の現」は「山」、の連関において歌われています。「古ゆ今の現に」は「見る人ごとに」を言っているのではありません。「古ゆ今の現に」と「懸けて偲はめ」の時制の問題も解消しました。問題点は、(1)ばかりか、(2)も(3)も同時に解消し果てました。

なお一言します。長歌と第1反歌の関連を最初に言い、立ち入った論証もいたしました。しかし、第2反歌を全体の連関に入れなかったら片手落ちです。二上山の嘆賞すべき「今の現」を歌いあげ、もっぱら「山から」の称賛に当てたのが第2反歌です。反歌を第1、第2と並べて、はじめて長歌との照応を完成しえたのです。

注

- ① ララシトは「雄々しと」、ウツセミは三山が姿をとった「山容」と私解します。その詳細は万葉省察(1)の拙稿を参照願うにとどめます。